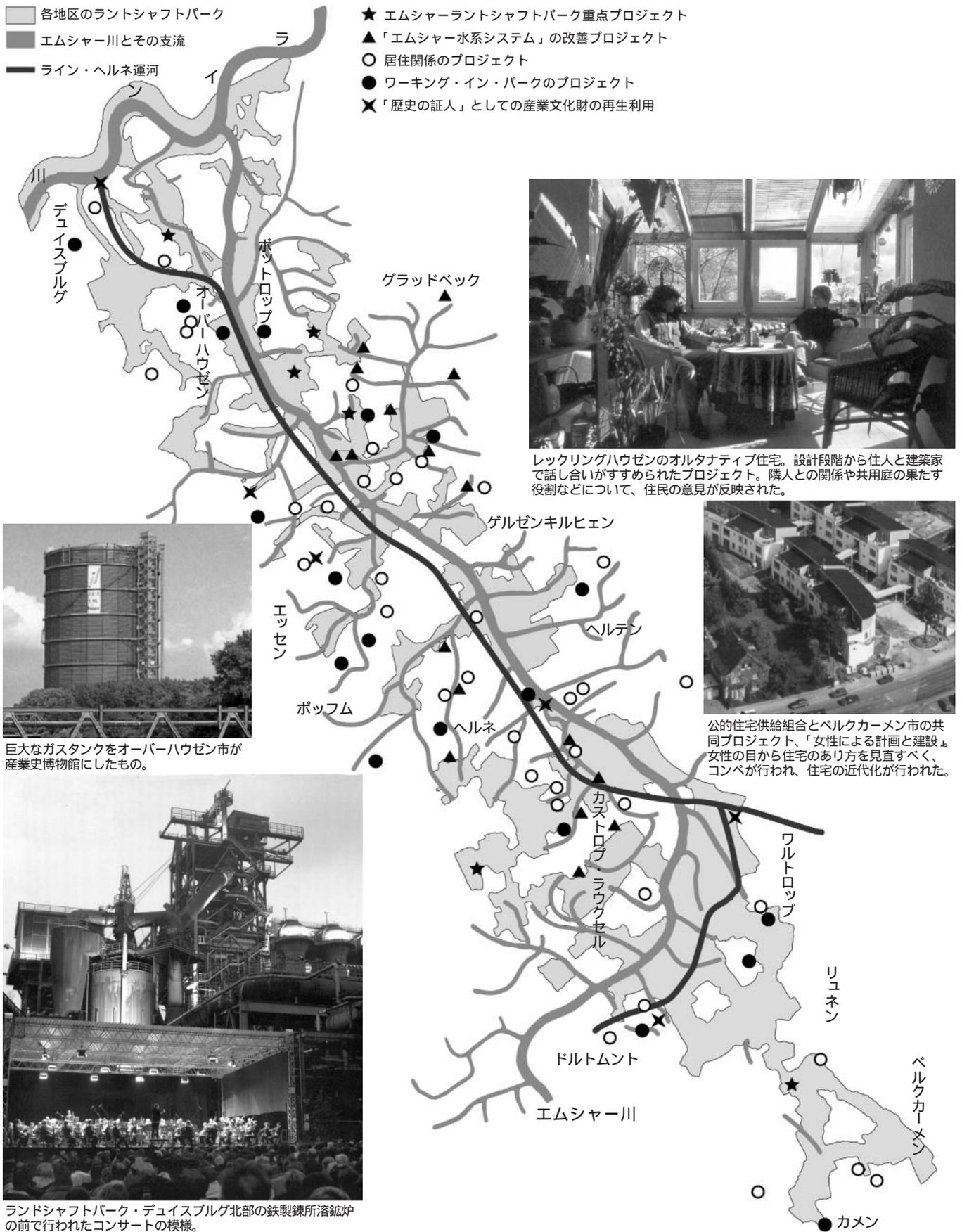


資料) IBAエムシャーパークの概要と主だったプロジェクト

- 各地区のラントシャフトパーク
- エムシャー川とその支流
- ライン・ヘルネ運河

- ★ エムシャーラントシャフトパーク重点プロジェクト
- ▲ 「エムシャー水系システム」の改善プロジェクト
- 居住関係のプロジェクト
- ワーキング・イン・パークのプロジェクト
- ✕ 「歴史の証人」としての産業文化財の再生利用



レックリングハウゼンのオルタナティブ住宅。設計段階から住人と建築家で話し合いがすすめられたプロジェクト。隣人との関係や共用庭の果たす役割などについて、住民の意見が反映された。



巨大なガスタンクをオーバーハウゼン市が産業史博物館にしたもの。



公的住宅供給組合とベルクカーメン市の共同プロジェクト。「女性による計画と建設」女性の目から住宅のあり方を見直すべく、コンペが行われ、住宅の近代化が行われた。



ラントシャフトパーク・デイスブルグ北部の鉄製錬所溶鉱炉の前で行われたコンサートの模様。

未来指向の「国際建築展IBA」の基本戦略

IBAエムシャーパーク・プロジェクトは、国際建築展IBAを活用したプロジェクトです。国際建築展IBAの基本戦略は、表の3つになります。「土地のリサイクル利用（産業遊休地の再利用）推進による都市的土地利用拡大の抑止」「補修、改善、用途転換による建物や生産施設の耐用年数の向上/エコロジカルな建設理論による新築」「エコロジカルな製品やエコロジカルな製造法に向けた、地域的な生産構造の転換」の3つです。今の日本の状況に合わせて考えると、こうした基本戦略は、第一次産業化以後、あるいは第二次産業化へ向けた政策のポイントだといえます。

例えば、「土地のリサイクル利用」ですが、産業によって疲弊している地域は土壤汚染が非常に進んでいます。ドイツのクルップ等の鉄鋼メーカーは、ルール工業地帯のエッセンやオーバーハウゼンの比較的都心部に位置していたのですが、日本でいうところの昭和60年代に次々と移転しました。地元の人に言わせると「稼ぐだけ稼いで、金を持って皆逃げてしまった」。そして、逃げた後には汚染された土壤が残ったわけです。

そこで、昔のヨーロッパ石炭鉄鋼連盟から補助金等を集め、新しい町づくりを行いました。当然土壤は汚染されていますから、封じこめ等を行ったり、思い切って都心に森を作ったりし、新しい町づくりを行おうというのが、IBAの基本戦略のひとつです。

1) IBA方式

国際建築展IBAエムシャーパークGmbHという組織

- ・10年間期限付有限会社 / NRW州100%出資
- ・職員約30名、社長1名、運営委員会18名
- ・以下の基本戦略を地域内のプロジェクトに埋め込んでいく業務を実施

国際建築展IBAの基本戦略

- ・土地のリサイクル利用（産業遊休地の再利用）推進による都市的土地利用拡大の抑止
- ・補修、改善、用途転換による建物や生産施設の耐用年数の向上/エコロジカルな建設理論による新築
- ・エコロジカルな製品やエコロジカルな製造法に向けた、地域的な生産構造の転換

IBAエムシャーパーク・プロジェクトの特色

プロジェクトは三つの特色を持つ壮大な実験だといわれています。

第一に、先ほどからお話ししているように、800平方キロメートルもの広大な地域を、水と緑を骨格として扱い、汚染され破壊された地域を、エコロジーを含めて再構築するという点です。

第二にIBA方式によって、コンセプト・デザイン・技術の各方面について、新しいアイデアを引き出す点。

そして第三に、“修復的”とでもいうべき手法によって、現在あるものを部分的に残しながら、新しいものをはめ込んでいくという点です。日本で「スクラップ&ビルドの時代は終わった、これからはリニューアルなんだ」と言われているのとほぼ同じニュアンスです。現存する古い建物のどの部分をどう残すのか、どこを新しいものに入れ替えたらいいかということです。これは総合的な評価を必要としますから、私のように40~60年代、白紙に格好の良い建物の絵を書いて実現させていくという建築や都市づくりばかりやってきた人間にとっては、新しい知識が必要になる手法です。

ちなみに江戸時代の建築や町づくりを調べますと、同じような考えで建物の古くなった部分だけを取り替える等は随分やっていたようです。また、欧米は石の建築の文化ですから、日本と比べてこうしたことをやるには有利だと言えます。

2) 三つの特色を持つ壮大な実験

特色1 広大な地域を、水と緑を骨格として扱い、汚染され破壊されたそれを、エコロジーを含めて再構築する。

特色2 ドイツ伝統のIBA（国際建築展）方式によって、コンセプト・デザイン・技術の各方面について、新しいアイデアを引き出す。

特色3 “修復的”とでもいうべき手法によって、現在あるものを部分的に残しながら、新しいものをはめ込むというやり方を多用する。

IBAはドイツ語のInternationale Bau-ausstellungの略。日本では通常、国際建築展覧会と訳される。展覧会という名前ではあるが、固定的な展覧会開催機関があるわけではなく、建築や都市計画分野でその時の先端的なテーマを取り上げ、それを恒久的に展示するドイツの伝統的な、建築や都市計画分野でのイノベーションの方式である。

極めて効率的なプロジェクト体制

I B Aエムシャープーク・プロジェクトを進めるにあたり、ノルトライン・ヴェストファーレン州は、10年の期限付の有限会社「I B Aエムシャープーク公社」を作りました。職員数30名ですが、そのうちの約半分が広報関係です。

とはいえ、広報関係の職員すべてがI B Aエムシャープーク・プロジェクト自体の広報宣伝に従事しているわけではありません。広報というと、日本では電通や博報堂など、宣伝による営利追求のイメージが強いのですが、ドイツでは違うのです。

ドイツの大学には広報学の学科があり、卒業生はいい意味でのコミュニケーションの円滑化と、それが必要なさまざまな部署で働いています。企業もあれば自治体もあります。企業でいいますと、C I (コーポレートアイデンティティ) の分野等で活躍しています。このような部署の出身の方が、公社に集められていたのです。

I B Aエムシャープーク・プロジェクトは、約100件のプロジェクトを実施しましたが、公社は実際、どのように関わったのでしょうか。

これらプロジェクトの事業主体は、自治体や民間などです。公社は、申請される多くのプロジェクトがI B Aエムシャープークに適切なものであるかどうか判断し、認めたものについては、積極的にコンサルタント活動を行います。つまり、産婆さん役で

あり、調整役ということ です。

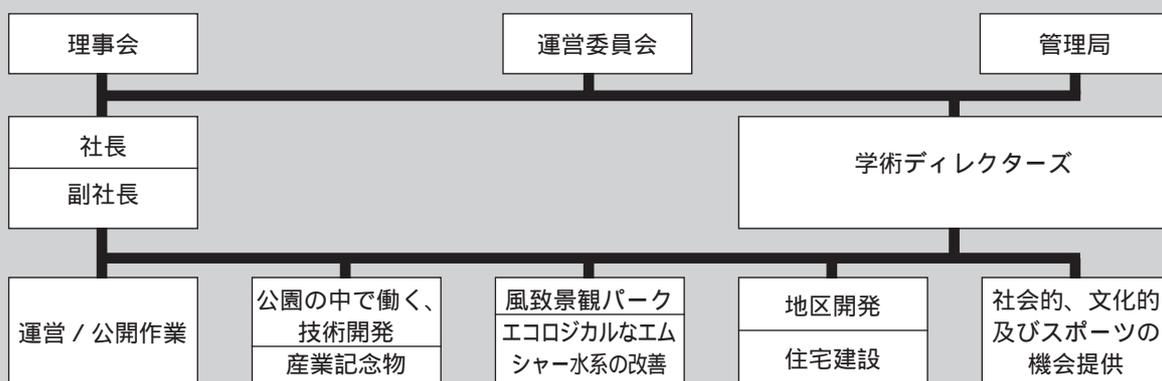
ですから、プロジェクトの総事業費との関係で見ても、わずか数十億円の基本財産で、10年間という短期間のうちに使命を終えるということでもおかしくないわけです。日本にはこうした例がほとんどなく、理解されにくい点であり、同時に非常に注目されている理由だと思えます。

公社の社長はプロフェッサー・ガンサーという方です。彼はもともと、連邦政府の総合的な課題を扱う研究所の所長をされていました。政治的にさまざまないきさつがあり、ノルトライン・ヴェストファーレン州の首相のもとに引き取られたのち、I B Aエムシャープーク・プロジェクトを提案し、自ら公社の社長に就任しました。

体制図にそれぞれ専門部会のテーマが書いてありますが、全ドイツで最高の権威といわれている各分野の専門家が部長になっています。この人たちは皆、パートタイマーで、「学術ディレクターズ」も同様です。皆、大学教授等の職にあります。

公社のオフィスはルール工業地帯の炭坑施設の古い建物を改造した中にあり、職員宿舎は簡単なホテルのようになっています。彼らは年間30日なら30日、毎週打ち合わせの前の晩から宿舎に泊まり、いろいろな打ち合わせの材料を作り、二晩ほど仕事をして帰っていくパートタイマーなわけです。実際の仕事は外部のコンサルタントに外注します。ですから、全体的には、目的のはっきりした、リーン・マネジメント的な管理がなされています。

3) I B Aエムシャープーク社の組織体制



プロジェクトの基本となる 5つのテーマ

前述の通り、I B Aエムシャープーク・プロジェクトでは100余りの具体的なプロジェクトを指定して実施し、水と緑のネットワークを再構築して公園化していきました。公社は5つのテーマを設け、全体のマネジメントを行いました。従って、100のプロジェクトは、5つのテーマのうちどれかに対応しています。

生活を豊かにするウォーターフロント

日本でいう「親水」と同じ意味のウォーターフロントを作ろうというものです。

エムシャープークは、石炭から鉄鋼、重化学の産業が発展していく過程で、工業地帯の「下水路」のようになってしまいました。実際、非常に臭いますので、これを人が親しめるような環境に改善しようということです。

歴史の証人（旧産業施設）の保存

炭坑や製鉄所などの施設を“歴史の証人”として残し、住民らが誇りを持つるようになるものです。

1970年代、ドイツでエレクトロニクスや自動車産業が勃興すると、シュツットガルトにはダイムラーベンツ、ミュンヘンにはシーメンス、メッサーシュミット等が移転します。それに伴ってルール工業地帯の住民の多くは、こうした地域に流れ込んでいきます。残された人々は、時代の変化に取り残されたという意識があり、誇りを持ってもらうことが重要になってくるわけです。

例えば、製鉄所の施設を公園化し、再利用した例

もあります。また、炭坑につきもののボタ山を、庭園設計デザイナーや国際的に著名なランドスケープデザイナーにデザインさせ、地域の風景として残すなどしています（20P）。このように、ドイツの他の地域に比べ、長い歴史はないけれど、自分達の曾祖父や祖父がここで暮らし、近代ドイツを築き上げたという証しを残していこうというわけです。

公園の中のインダストリーパーク

“旧工業”から脱却する“ニューインダストリー”とは、環境対策技術等の新しい産業を、地元の大学と共同で開発したり、国際的な連携を持って開発しようというものです。

新時代にふさわしいハウジング

地域の人々が安全に暮らすには、住宅や都市の生活施設など、住環境の整備が不可欠です。例えば、写真の住宅は、日本でいう炭坑住宅ですが、これを修復し、住宅として供給しています。まず、昔の面影を残すため、新しく瓦を焼いて入れています。また、省エネルギーのため、窓ガラスはすべてペアガラスに取り替えています。そして、昔の炭坑住宅は、建物の棟と棟の間を広く取っているため、この間に新しい住宅をはめ込んで、全体の収容力を向上させ、かつ環境も改善しようとしています（14P、20P）。

社会的・文化的活動への支援

I B Aエムシャープーク・プロジェクトは、疲弊した旧工業地帯を再生するのが目的です。ですから、施設を作るだけでなく、活性化のためのさまざまなイベントも実施されています。音楽会や演劇など、さまざまな催しが行われています。（14P）

4) I B Aエムシャープーク・プロジェクトの5つのテーマ

- テーマ1 石炭や鉄鋼製品の運輸に使われた運河・港湾を改修し、市民生活に密着した“ウォーターフロント”を作る。
- テーマ2 “企業遊休地”化した炭坑、製鉄所などの部分を“歴史の証人”として残すと共に、その施設や土地を再利用する。
- テーマ3 “旧工業”から脱却する“ニューインダストリー”開発のための拠点“インダストリーパーク”を作り、地域産業を活性化する。
- テーマ4 “住宅とその周辺環境”を整備し、公園（パーク）内での日常の生活を便利で快適なものにする。
- テーマ5 （施設建設と直接関係なく）社会活動や文化活動の活性化を図る。各種イベントの開催、展覧会の開催など。

ドイツで生まれた伝統の I B A方式

I B AのIはインターナショナルで国際、Bはパウエン（英語のビルディング）、Aはアウシュテルン（英語のエキジビション）で展覧会で、日本語では国際建築展と呼ばれています。ドイツにおいて、100年ほど前からしばしば行われてきた「展覧会や展示会のような活動」です。

例えば、シュツットガルトのワイセンホーフ・ジードルングは、近代建築のモデル開発を行ったI B Aです。まず、一つの団地が計画され、建築の分野では世界的に著名な建築家を何名か呼び、アパート建築の計画を作らせました。アイデアはパネルにして展示し、市民に選んでもらいます。選ばれた計画はお金を出し、実際に施工し、実際に住居として使います。施工の過程や住んでみての実態は全部公開され、新聞等で報告されています。

新しいアイデアを外部から積極的に集める点、プロセスを全部公開する点を特徴とする「展覧会や展示会のような」やり方を、ドイツでは昔からI B Aと呼んでいるわけです。

ワイセンホーフ・ジードルングのI B Aが1920年頃。その後、様々なI B Aが開かれました。建築デザインの人々の記憶に最も残っているのは、第二次世界大戦直後にハンザフィアテルで行われたインターバウという大きなI B Aです。当時、世界のこれという建築家が集まり、マンションのデザインコンテストを行ったものです。また、ベルリンの壁が崩壊する直前に行われたベルリンの町全体の再開発プロジェクトのI B Aもよく知られています。これは「ニューI B A」、「オールドI B A」の地域に分かれて行われました。そして、新しい建物を作るI B Aベルリン・プロジェクトと、古くからある建物を手直しするI B Aプロジェクト・ベルリンの二つのプロジェクトが行われました。これらの後に登場したのが、I B Aエムシャーパーク・プロジェクトなのです。

I B A方式を 地域開発に適用

I B Aエムシャーパーク・プロジェクトの大きな特色は、I B A方式を地域開発に適用し、展開した点です。そして、地域開発のプロジェクトレベルでは、建築や都市計画の人たちにあまり発言権がなく、エコロジーや産業開発の専門家の発言権が強いということが重要です。

I B Aエムシャーパーク・プロジェクトでは、一番最初、公社を作る以前に行っていたことがあります。それは、地域16自治体の人々を集め、ルール工業地帯のエムシャー川流域にはどんな問題があり、解決策は何か、将来どのような開発をすべきかについての、1年間にわたる議論です。結果は小冊子にまとめられ、I B Aエムシャーパーク・プロジェクトの基本コンセプトになりました。これが前述の3つの特色、5つのテーマとなり、具体的なプロジェクトへと展開されていったわけです。

その後公社が設立され、実務を進めていきました。プロジェクトは、公社が事業主体ではなく、自治体や民間が主体であることが多いのですが、事業主体さえかまわないのであれば、建築デザインのコンペティションの開催を、積極的に推奨しています。

内容を公開し、 市民参加でプロジェクト推進

プロジェクトで大変面白かったのは、河川浄化についてです。

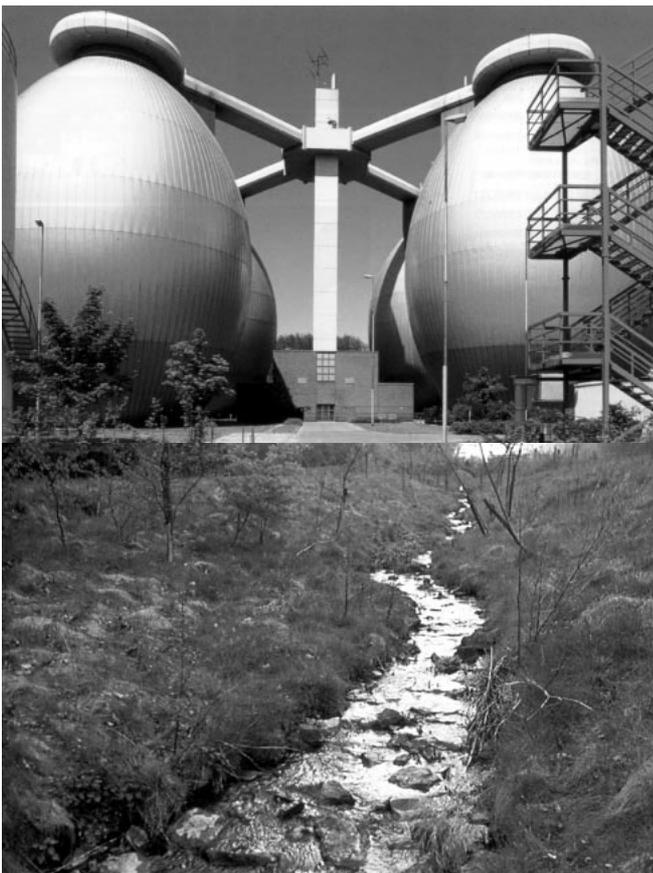
プロジェクトでは初期の段階で、下水化したエムシャー水系の浄化のエンジニアリングコンセプトについて議論しています。そして、相当なお金を払い、二つのコンサルタント会社に以下の内容について研究を依頼しました。

エムシャー川には、汚染した水を浄化してからライン川に流すよう、広大な浄水場が備えられていました。これは昔ながらの考え方に基づくものです。これに対し、水系ごとに中小規模の下水処理施設で分散処理し、中水も利用するシステムの導入を計画

し、その妥当性を検討しました。どちらの考え方が妥当なのかという点。浄化後の汚泥の集積をどれくらいの単位にまとめるべきかという点。できるだけ昔の川に近付けるには、どんなデザインがよいかという点などです。

コンサルタント会社から提出されたレポートは、全部公開されました。そして、テレビ局や一般市民を集め、どちらの方法を採択すべきか、喧々諤々議論したのです。これはI B A方式をよく象徴している話だと思います。

また、エムシャー川は蛇行した河川ですから、雨が降るとどこかに雨水がたまっていました。たまる場所がないと洪水を引き起こします。そこで、雨を一時的にためておく場所を設計しました。建物と建物の上に降った雨は、できるだけ浸透させるようにしました。また、ある一定の間は、川として流す部分と、配水管に入れて流す部分を作りました。川として流れるものは、実は中水を流しています。まだ全部工事は終わっているわけではありませんが、このような仕組みをいろいろ考え、川を設計し直し、エムシャー川を「人工的」に「再自然化」したのです。



I B A指定で得られる 3つのメリット

自治体やインダストリーパークを作る半官半民の組織体が、I B Aエムシャーパーク・プロジェクトに参加するインセンティブとなったのは、図の3つです。

自治体がプロジェクトに指定するかどうかは、投資対効果を含め、議会で計画の評価を行います。そこでもし、全く同じ投資額、同じ効果の案件が二つあった場合、I B Aプロジェクトの方を優先的に採用することを基本としています。全部で百数十件の計画は、このルールに沿って決められたそうです。

次いでI B A社のコンサルティング・サービスの中で極めて重要なのは、補助金についてのコンサルティングです。日本もそうですが、ドイツでも縦割り行政的で、様々な補助金が用意されているにもかかわらず、プロジェクトに最適な補助金の組み合わせを見つけるのは結構大変なのです。公社ではこれを整理し、最適な組み合わせを提案してくれます。

三番目に、プロジェクトにI B Aのブランドがつくと、公社が海外に向けてどんどん宣伝してくれるため、相互作用が生まれ、事業に大きなメリットになります。こういう業務に、前述した広報のスペシャリストの腕が生きてくるわけです。

5) 個別プロジェクトから見た インセンティブ

- 1 プロジェクト実施面でのプライオリティ
- 2 I B A社のコンサルティング・サービス
- 3 宣伝効果

左上：1927年に設置されたボトロップ浄水場。
新たに施設が拡張され、景観の一部となるように設計し直された。
左下：実験プロジェクトとして再自然化された
エムシャー川支流のデルウィガー川。

IBAで行われた 個々のプロジェクト

賃金支払い所やマシンハウスは、昔の経営者らは随分お金を注ぎ込んで立派な建物を建てました。ドイツの歴史の先生らは、こうした建物を研究し、保存の価値があると述べています。そこで、歴史の証人として残す、あるいは企業がオフィスとして入居するなどしています。例えば、ガスタンクを美術館に利用した例もあります(14P)。

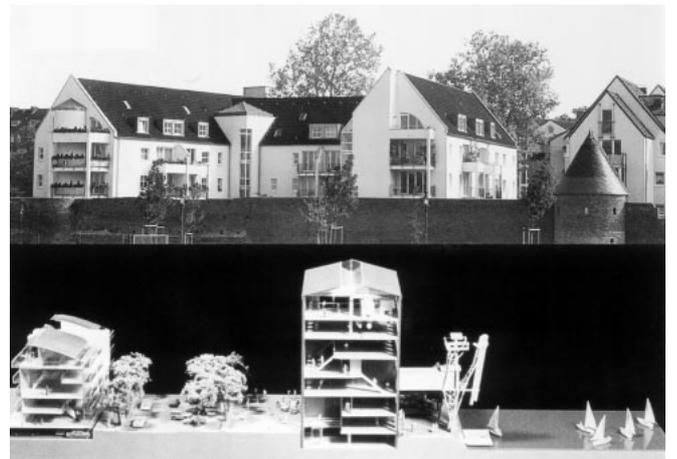
ちなみにマシンハウスとは、生産プラントの中にある、蒸気機関でいろいろなものを動かす装置を設置した建物のことです。



古い運河の船舶昇降リフトを歴史の証人として、観光資源にしています。レストランに転用しています。



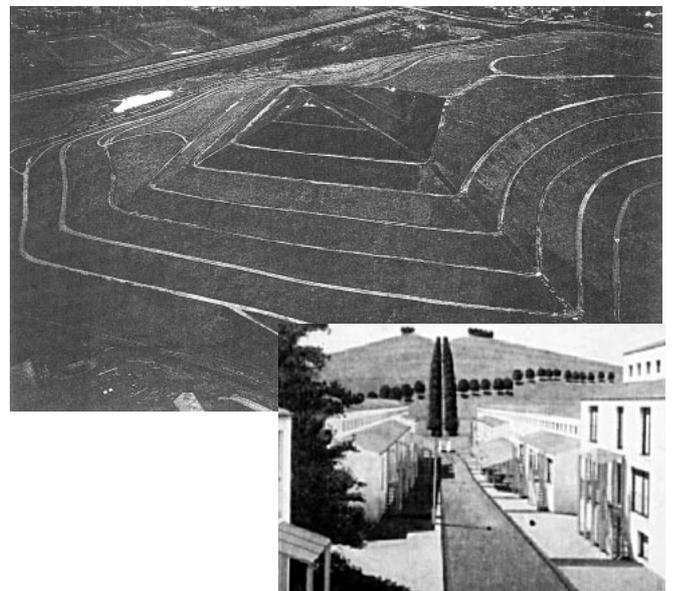
エッセンの河川港の荷揚げ場に新しい住宅を作っています。ヨット遊びをしながら、コンピュータソフトの開発をしようというプロジェクトです。



これが炭坑住宅に新しい建物を埋め込んだ事例です。



通りの突き当たり美しくデザインし直したポタ山を配置したランドスケープデザインの例です。



誘致したインダストリーパークは図のようになります。エコ・テキスタイルとは、本来テキスタイルは紡糸や染色の段階で、かなり水を汚染しますが、これを回避し、エコロジーにかなったシステムにしたものです。大学の研究者が推進しており、大学近くの炭坑の建物を再利用してインダストリーパークを形成しています。

また、技術開発センターとしては、大気汚染を測定し、対策を立案する環境保護技術センターがあります。そしてファッション関係のインダストリーパークです。



300mのガラスファザードを持つラインエルベ・サイエンスパーク。

6) 「公園の中で働く」インダストリー・パーク的なプロジェクトの事例

| | |
|-------------------------------------|---|
| 新規事業育成センター 先端技術立脚の インダストリー | エコ・テキスタイル産業センター(ホラント炭坑跡地) エコ・パッケージ産業センター(リュンテック) |
| 技術開発センター 環境対策技術の 開発とその販売 | 環境保護技術センター (オーバーハウゼン) |
| ファッション産業センター 国際的なファッション 産業の集積 | ユーロゲート・センター (デュイスブルグ) |

エコロジーとエコノミーをどう調和させるか

最後に、I B Aエムシャーパーク・プロジェクトを私なりにまとめたのが、図です。

このプロジェクトは、エコロジーとエコノミーの調和を図るため、マクロ対策とミクロ対策の二段階で分かれているところが、本質ではないかと思うのです。

対策2について補足しますと、最近日本の専門家の間でも理解されてきましたが、土地にはブラウンフィールドとグリーンフィールドがある、という考え方です。ブラウンフィールドは、一度工場等を作った土地、人の使った土地を指します。グリーンフィールドは処女地です。ノルトライン・ヴェストファーレン州の場合、I B Aプロジェクトをやっている最中は、一切グリーンフィールドの開発はしないと、法律で決めてしまいました。また、2～3年前、イギリスでも、10件のプロジェクトのうち、6割は

7) I B Aエムシャーパーク・プロジェクト：エコロジーとエコノミーの調和

マクロ対策

- 対策1** 地球環境のエコロジー的な再構築
 “水”：エムシャー川のエコロジー的な再構築
 “緑”：風致景観パーク・ネットワーク
- 対策2** いかなる場合も、意のままになるリサイクルできる土地の潜在力を利用し尽くすことなしに、まだ開発されていない土地や農業用地を、建設用地に利用してはならない。
- 対策3** “企業遊休地”の再利用における“緑”
 : 最低用地の40%を確保する

ミクロ対策 汚染土壌対策

- 対策1** 政府の政策：土地基金による汚染土壌買い上げと土地リサイクル
- 対策2** 再開発ビジョンによるリサイクル土地のヴァリュ・アップ
- 対策3** 土地リサイクル・テクノロジー、ノウハウの開発によるコストダウン
 汚染土壌を取り扱う際の目標と要求条件
 “汚染土壌の再生・安定化”技術と
 “地盤改良”技術

ブラウンフィールドにしなさいということを決めました。日本は、このような制約は全くありません。

ただし、同じドイツでも、旧東ドイツのザクセンアンハルト州周辺では、産業活動の活性化のために、都市郊外に一戸建住宅等の開発を許可しています。これは、郊外に戸建住宅を作って移住できるということが、地元住民の励みになるので、環境保護をと堅く考えず、開発を許したものです。

また、対策3に「“企業遊休地”の再利用における“緑”：最低用地の40%を確保する」とありますが、日本でも昭和40～50年頃から展開されています。

評価は広く、長く、そして厳しく

プロジェクトの評価は、図の3つのポイントで行われています。

まず、広域環境の改善を評価しています。たとえば教会などの歴史的建物を文化財として修復し、残します。日本でも文化庁が神社やお寺を残そうとします。しかし、お金がかかります。ドイツではこうした際に文化財の保存によってその建物のあるエリアの環境価値が上がることを評価しているのです。つまり、広域での環境の改善を評価しています。

次いで、投資を長期で評価します。そして厳しい品質管理です。

例えば、あるプロジェクトをIBAプロジェクトとして申請した場合、どんな背景で、何を目的としたどんなプロジェクトなのか、文書提出と説明を公社から厳しく求められます。そして、プロジェクトマネージメント面で、プロジェクトの品質を左右す

るポイントはどこで、誰がどのような方策で責任を持って実施するかを強く迫られるのです。

公社はプロジェクトに直接手を出せません。ですから、IBAのプロジェクトが所期の成果を挙げてくれないと、公社の評価が下がることとなります。したがって、このように、厳しい品質管理を要求するわけです。

日本でも理解されてきた IBA方式の有効性

私達がIBAエムシャープーク・プロジェクトを日本に紹介したのがちょうど7年前です。当時は、北九州や大阪のベイエリア開発推進機構の方々に集まっていたとき、1日かけてシンポジウムなどを行いました。当時日本には京浜の臨海工業地帯の再開発など、きらびやかな計画が満ちあふれていました。海外の事例ということでそれなりに興味を持っていただけなのですが、IBAエムシャープークは地味なプロジェクトばかりでしたから、「何でそんなことをするんですか」とか「10年して任期が終わった後、どうするんですか」という程度の質問がたくさん出たのです。

ところが最近、WRAP委員会には、さまざまところから問い合わせが来るようになりました。10～15年経過して、日本でもIBAエムシャープークのようなプロジェクトの有効性が少しは理解されるようになったのだと思います。

環境問題についての認識の仕方が随分変わったし、地方分権の動きも出てきました。また、プロジェクト・マネージメントの考え方や知識も、ここ10年で随分普及してきたことが背景にあると思います。

8) IBAエムシャープーク・プロジェクト：プロジェクト・マネージメントのポイント

ポイント1 広域環境の改善を評価する：“教会”改修を単独で評価せず。教会の周辺を含めた環境の改善を評価。

ポイント2 投資を長期で評価、ライフサイクルで評価。

ポイント3 厳しいクオリティーコントロール：
IBAエムシャープーク社の5年目の総合評価

澤田 誠二（さわだ せいじ）

1942年生まれ。工学博士。東京大学工学部建築学科卒。日本・ドイツで建築設計に従事のものち、1976～78年、ドイツ・フンボルト財団の助成を受け日欧の住宅政策の比較研究。1982年清水建設入社、エンジニアリングと技術開発に従事の際ら、地域開発、都市交通プランニング、スケルトン住宅に関する研究・開発を国際ネットワークにより推進。2001年より現職の滋賀県立大学教授（環境科学、社会計画専攻）。WRAP委員会幹事。

WRAP委員会とは「知恵の国際的交流を通じて地域の活性化を図る」という趣旨の地域開発手法の自主研究会（会長：伊藤滋・慶應義塾大学大学院教授）。日独フォーラムを契機に発足し、近年は「持続可能な開発：沖縄モデル」などのプロジェクトを進める。